

働き女子のごほうびセミナー

「働くということ」

1. 「働くこと」を意識した子どものころと市役所での最初の仕事

——： 本日は、「働くということ」をテーマに、千葉悦子館長によるインタビューを行います。お話をお伺いするのは、南相馬市復興企画部長の庄子まゆみさんです。では、よろしくお願いします。

千葉： お忙しいところ、ありがとうございます。

庄子： よろしくお願ひします。

千葉： 2015年には女性活躍推進法が制定され、2020年には、女性リーダーを3割にしようという目標も設定されていきました。ところが目標を達成することはできませんでしたし、福島県においてもまだまだ進んでいません。そのようななかで、庄子まゆみさんは現在、南相馬市の復興企画部長で、まさに管理職のトップで、仕事を前に進めておられる方です。今日はいろいろなお話をお伺いして、どうすれば女性管理職の登用をさらに広げていけるか、そのヒントを得たいと思っています。ぜひ、率直なお話をお聞かせください。今日はよろしくお願ひいたします。

庄子： こちらこそ、よろしくお願ひします。

千葉： まずは、いつごろ南相馬市役所にお勤めになられて、どのようにして今に至っているのか、お話ししていただけますか。

庄子： 私は、大学を卒業したのが1984年（昭和59年）で、それからすぐに、当時の原町市役所に入りました。実は私、正式な職員になるまで4年かかっています。正式に職員として採用になったのが1988年（昭和63年）の4月から、それまでは臨時職員として市役所の中で勤務していました。

私は、大学を出てすぐに市役所に勤務しようと思っていましたが、その理由は二つあって、大学時代、スキーにはまってしまって、就職してからもスキーができる福利厚生がしっかりしている職場はどこかなと考えて、そこで市役所がいいかなというよこしまな理由が一つ、それから、もう一つは真面目な理由ですが、市役所というのは人が生まれる前から亡くなった後までのいろいろな仕事をする職場なんです。そのような仕事に関われるというところが魅力だと思って選びました。民間会社で、一つの仕事に特化してずっと極めるというよりは、様々な仕事ができる市役所が私の性格には合っていると思い、現在に至っています。

千葉： 大学時代にそういったことをいろいろ考えながらということですが、高校生や中学生の時はどんなふう

に考えていましたか。

庄子：私は小さいときからずっと働きたいと思っていたんですね。そう思っていた理由は、一つは、両親が非常に体が弱くて、もしかすると自分が子どものうちに両親がいなくなってしまうんじゃないか、早く自立しなければと、そういう気持ちが強かったということがあります。早く自立して、仕事を持って経済的に安定したいと思っていました。

それからもう一つは、私が中学生のころ、父が母に向かって「お母さんは社会性がないよ」って言ったんです。私はそれが、母が専業主婦だから社会性がないというふうに父が言ったような気がしたんですね。母は確かに、嫁いだときからずっと寝たきりの父の母親、しゅうとめの世話をしていました。今だと介護保険制度がありますが、そのころはそういう制度もなく家族で介護をする時代です。それをずっとやり遂げて、私たち子どもも育てて、また、私の子どものころというのは高度経済成長のまただ中で、父は土日仕事をしてほとんどうちに帰れなくて、地域のこととか家族のことを母が一切やっていたわけです。その母に「社会性がないよ」ってひとこと言ったことがものすごく私は引かかったんですね。外で働く人は社会性があるって、うちの中のことを中心にやっている主婦とか女性は社会性がないんだろうか。私は、一度は外に出てそれを確かめてみなくちゃと思って、学校を卒業したら絶対働くぞということで、職業に対する意識はちょっと強かったかなというふうに思います。



庄子まゆみさん

千葉：時代的にはまだ男女雇用機会均等法とかも制定されていないときですよ。周りはどうでしたか。

庄子：そうですね。同級生は働くということについて強い意識を持っていた子はそれほどいなかったかなとは思いますが、お友達の中には、やはり大学まで進学して、私はこういう職業に就きたいということを言う

子はいたと思います。ただ、やはり、大方の人は職業意識は漠然としていたかなと。男の子に比べて女の子のほうの職業観というのが漠然としていたかもしれないと今考えるとと思いますね。

千葉：じゃあ、お友達とか同級生と、将来どんな仕事に就きたいかとか、「自立するために仕事に就くぞ」みたいな話はしなかったですか。

庄子：特にはしなかったですね。ひそかに私の中では仕事をするぞという感じてましたね。それもあまりかたくなにでもなく、当然、仕事をするんだらうなど。どういう仕事を私はするかなというのは少しずつ考えてはいましたけども。ここまで、こんなに一生懸命に仕事するとはあのころはまだまだ思わなかったですが、仕事には就きたいと思っていました。

千葉：余談ですけど、私は庄子さんよりもだいぶ年上なので、中学、高校の同級生ですと、短大を選ぶか、あるいは高校を卒業して就職する人が多く、四大に進学する子はそんなに多くなかったんです。時代の雰囲気「いずれ結婚して奥さんになるんだから四大に進学する必要はないのでは」とか、「就職するとすれば短大ぐらいのほうが絶対有利」という感じてました。そのようななかで、私は四大に行くぞ、とにかく社会的に自立しなければいけないと思っていました。私たちのあとは、働く女性もどんどん増えてきて、そんなに肩肘張らないでも行けるような時代になりつつあったということかもしれませんよね。



千葉悦子館長

庄子：私が就職したころは、ちょうど男女雇用機会均等法、第1ステージでして、女性の総合職が出ていたりして、世の中の機運が変わった時期かなとは思っています。ただ、私が大学のころはバブルのころでもあって、ずっと働き続けるというタイプと、大学を出て腰掛けでいい会社に入って、いいお相手を見つけて退

社するという、そんな二つのパターンがあったかなとは思いますが。

千葉：就職先として、南相馬市役所を選んだのは地元だからですか。

庄子：はい。

千葉：ほかのところは考えませんでしたか。

庄子：大学は東京ですが、在学中からちょっと地元志向がありましたね。両親の体が弱かったというのもあり、あとはやっぱり、東京という華やかなところにちょっとなじめなかったというのもあって、地元福島県でというところが第一にありました。あとは、大学在学中から、夏休みとか春休みとか長期の休みのときに地元でアルバイトをして、どういう仕事があるのかということを見ていました。その中で、県の出先機関でアルバイトをしたときに、公的な機関は仕事の幅が広いなと思って、最終的には、人が生まれる前から亡くなった後までの仕事がある市役所に就職しようと決めました。

千葉：同期の女性はたくさんいたのでしょうか。

庄子：いや、いません。私1人でした。私の4年前に1人女性が入っていて、大卒の女性職員は本当に少なかったですね。受験する人は結構いたと思いますが、今では合格する女性が増え、半分近くいる年もあります。最近では、市役所の職員の男女の構成比は変わってきました。

千葉：では、本当に男性の中にぽつんと女性がいるという状況ですよ。

庄子：そうですね、はい。

千葉：やりづらくなかったですか。

庄子：そうですね。アルバイトをしていたときからもそうでしたけど、女性の仕事と男性の仕事はやっぱり違うんだなって、思っていました。女性の場合は、お茶くみから、当時は今のように分煙ではなかったので、灰皿を洗ったり始末をしたり。たばこを吸わない女性が、男性が吸った灰皿を整理するというのはどうなのかなと思いつつ、そういうものなんだっていいながら仕事をしていました。あとは、女性は比較的庶務的な仕事が多かったし、男性はどんどんいろんな経験をさせてもらえるというようなことを、仕事を始めた当初は感じていましたね。

千葉：そうすると、仕事が終わったあとに灰皿の掃除をするということでしょうか。

庄子：そうですね。

千葉：それは女の仕事？

庄子：はい。それが一般的でした。

千葉：時代を感じさせられます。

庄子：本当にそうですね。40年近く前はそういう時期でした。今ではそんな職場はほとんどないと思いますね。

千葉：そうですね。では、こんな職場は嫌だなと思ったことがありますか。

庄子：いや、そこはないですね。

千葉：そこまではない？

庄子：そうですね。机のお掃除なんかも女性の仕事になっていたんですが、私は、結構、ほかの職員の机の掃除をするのが好きで。というのは、机の掃除をすると、その人の仕事ぶりというか、仕事のしかたというのがわかって、この人はこういう仕事をするんだなと、そこがおもしろかったですね。灰皿の掃除だけは嫌だったんですけど、あとの雑用というのはそうそう嫌でもなく、あと、雑用をいろいろ頼まれることで、役所の中でいろんな部署に行けて、そんなことも結構楽しくて、こんなものだと思いながらそれなりにやっていたという感じですね。



千葉：そうか。そこが違うんですね。

庄子：そんなこともないと思いますけど。

千葉：仕事は庶務的なものも多かったということでしたが、まずはどこでどんな仕事をされたのですか。

庄子：市民課の中に国民年金の係があって、そこに配属になりました。国民年金というのは国の仕事で、それを市町村が窓口になって手続きします。そういう仕事なので、結構、お年寄りの方たちが窓口に来たりというような対応の仕事でした。当時は、市役所の仕事全体像が見えていなくて、市役所というのは国や県の仕事も引き受けてやっていたり、市町村独自の仕事もやっている、そういうところなんだなというのはあとからわかってきました。

国の仕事なので、基本的には法律や各省庁の規則に基づいて進めるものなので、市町村が柔軟に変えたりするものではないんですね。決められたとおりにやっていくんですが、窓口業務なので、いろん

なおお客さまがいて、制度の不具合を批判される方もいます。「国で決まっていることなので」といってもなかなか納得しない方もいて、市役所の業務は、多岐にわたるということをひしひしと感じました。そんなことを経験しながら、いちばん最初の職場では過ごしていました。

千葉： 市民課国民年金係でスタートして、そのあと3年か4年ぐらいで替わっていくんですか。

庄子： そうですね。そのあと市民課の中に新しい係ができて、そこで男女共同参画に関する仕事をすることになりました。そこは市民相談係という係でしたが、なぜか男女共同参画とか消費者行政など、いろいろなものを担当している係で、そこで初めて女性の係長に仕えることになりました。男女共同参画ということで、女性の係長と女性職員が配置されたのだと思いますが、そのときに他の市町村の男女共同参画の取り組みを調べ始めました。国民年金という国のお仕事から男女共同参画の市町村の政策的なところに関わっていくということが二つ目のお仕事でした。

千葉： 最初は国の仕事をし、次は市町村のそれぞれの政策の違いとかが見えてくる仕事に就いたわけですね。この市民課では、市民生活に関するいろいろなことを幅広く扱う仕事をやってらしたわけですね。

庄子： そうですね、いろんなことをやりました。あのころ初めて男女共同参画というのが業務としてできたんだと思います。新しい業務なものでこの部署が担当したらいいかわからなくて、結局、新しい係にやらせよう、みたいな感じでしたね。

千葉： それは、何年ぐらいかな。1990年代？

庄子： そうですね。

千葉： 90年代は、男女共同参画政策が大きく転換していく時期でもありましたね。

庄子： そうですね。あのとき東日本の自治体から計画を全部取り寄せたんですよ。どんな計画をつくっていて、どんな取り組みをしているんだろうと思って。そうしたら、結構小さな町でも計画をつくってちゃんとやってらっしゃる。そこにちょっとびっくりしました。だから、なんていうのかな、自治体の規模と政策の質は関係ない、小さいからどうのこうのじゃないんだというのが初めてわかりましたね。

千葉： すごいですね。東日本の自治体を全部取り寄せるというようなことは、そのときの係長がそうしなさいと命じたのでしょうか。

庄子： 一緒に話をしてやりました。何をやっていいか私たちもわからなくて、やっているところから勉強しましょうということで全部取り寄せて、それで、次はアンケート調査をやって、そんなふうには政策形成のステップを踏んでいくことになりました。私は計画策定までは担当しませんでした。いちばん最初の調査の部分を中心に担当していたということになります。

千葉： そうすると、自治体それぞれの役割や政策を打ち出していき、それがすごく大事なことだなということを経験した中から学んでいったわけですね。

庄子：そうですね。たまたまですけど、男女共同参画が私の中では政策に関わる第一歩だったと思います
ね。